

ナチス時代のドイツ文学

谷 崎 英 男

人類に未曾有の惨禍をもたらした第二次世界大戦が一九四五年に終了して以来、すでに二十年になん年とす年月が経過しようとしているが、今次大戦を引き起した元兇ともいふべきナチス時代のドイツ文学についてドイツの文学史家ないしは文芸評論家は一体どのような評価を下しているのであらうか。遺憾ながら手元にある現代ドイツ文学に関する著書を拾つてみてもナチス時代のドイツ文学について触れている箇所はごく僅かである。たとえばボン大学教授ヴィルヘルム・グレンツマン(W.Grenzmann)の『現代ドイツ文学』(Deutsche Dichtung der Gegenwart 1955)は今世紀前半のドイツ文学を様式形態の順序に叙述し、戦後の文学にもかなり頁がさかれているが、ナチス時代のドイツ文学についてはまったくといっていいくらい、触れていない。またヘルマン・フリートマン(Hermann Friedmann)とオットー・マン(Otto Mann)の編集した『二十世紀のドイツ文学』(Deutsche Literatur im zwanzigsten Jahrhundert 1957)においても、オットー・マンが『戯曲』の部において、ドイツの演劇が常に全西欧的文化との交流の中で作られてきたことを指摘し、「ナチス国家社会主義の勝利はこのつながりを断ち切り、政治色の強い傾向文学のみが栄え、『シュラーゲター』(Schlageter)のハンス・ヨースト(Hanns Jost)、グレゴールとハインリッヒ』(Gregor und Heinrich)のエルヴィーン・グイード・コルベンハイヤー(Erwin Guido Kolbenheyer)、クルト・ランゲンベック(Curt Langenbeck)など優れた作家や劇作家達もこの傾向文学に身を捧げ、わずかに亡命作家達が世界文

学によって露命をつなぎえたにすぎないこと」を述べているにとどまっている。

また一九五二年にパウル・フエヒター (Paul Fechter) によって書かれ、その後クルト・タンク (Kurt Tank) とウィルヘルム・ヤロプス (Wilhelm Jacobs) によって加筆された『ドイツ文学史』の二巻目である『二十世紀の文学』(Die Literatur des zwanzigsten Jahrhunderts 1962) も、「ナチス時代がドイツにおける文学生活の血液循環を締めつけようと試みたが、窒息させることはできず。空虚な『血と土の文学』(Blut-und-Boden-Schrittum) という虚像を打ちたて、ドイツにおける文学像をゆがめ粗悪化した。多くのものが失われたり、空襲でやかれたり、用心のために著者自身によって無に帰せられたが、文学活動はひそかに、あるいは隠れて、あるいは国外および国内亡命 (äußere und innere Emigration) において、あるいは偽装した形で行われた」ことを記しているにすぎない。そして「一九四五年以後の文学はすでは一九四五年以前に始まっている」として、戦後に発表されたローベルト・ムーズィル (Robert Musil) の『特性なき男』(Der Mann ohne Eigenschaften) やヘルマン・ヘッセ (Hermann Hesse) の『ガラス玉遊戯』(Glasperlenspiel) やエリザベート・ランゲッサー (Elisabeth Langgässer) の『消えなう封印』(Uauslöschliches Siegel) やルードルフ・ハーゲルシュタング (Rudolf Hagestange) の『ヴェニス信条』(Venezianisches Credo) やゴットフリート・ベン (Gottfried Benn) の『二重生活』(Doppelleben) やデルト・ガイザー (Gerd Gaiser) の『死の飛行』(Die sterbende Jagd) やヘルマン・カザック (Hermann Kasack) の『流れの背後の市』(Die Stadt hinter dem Strom) などがすでに戦争中に構想され、書き始められたことを述べているだけである。

このようにヒットラーが一九三三年に政権を取って以来終戦までの十二年間のドイツ文学が無意識にか、あるいは故意にか無視されていることは、ヘルマン・ヘッセのいうようにこの時代の作品の中に「まじめに考えるべき」ものがない(注1)ということも知れないが、ある意味で納得の行かないことである。このことはドイツ人自身にも感ぜられると

見えて、一九五一年以来各種の文学活動に従事しているジャーナリストであるフランツ・シュローナーウワー (Franz Schönerauer) もその著『第三帝国におけるドイツ文学』(Deutsche Literatur im Dritten Reich 1961)の序文において次のように述べている。

「ジャーナリズムは政治的な面においては、ドイツ史の最も近い過去の解明について貢献するところがあったが、(ブラッハー、コーゴン、ポリアコフ、ゴロー・マン、ヴルフ、ブロス、ロートフェルスなど) 第三帝国におけるドイツ文学に関してはそれに応ずべき叙述はまだなされていない。カルル・アウグスト・ホルストにおいても『現代ドイツ文学』、クルト・ホーホフにおいても『精神と根源』、クルト・タンクによつて加筆されたパウエル・フェヒターの『ドイツ文学史』においても、ヘルマン・フリートマンとオットー・マンによつて編集された『二十世紀のドイツ文学』においても、また最近出版されたヘルダーの『世界文学辞典』の中のドイツ文学の項においても、この痛ましい項目は取り扱われていない。ゲオルク・ルカチの『理性の破壊』はドイツ精神の清算であつて、文学はもっぱらそのファシズム的イデオロギーの内容から吟味されており、ヴァルター・ムシエクの『ドイツ文学の破壊』は短い随筆的な小品にすぎない。」

またヘルマン・グラザー (Hermann Glaser) もその著『第三帝国』(Das Dritte Reich 1961)の緒言において次のように述べている。

「終戦後十五年ナチズムとの対決は、克服されない問題として今なおわれわれの眼前におかれている……一九四五年以後の数年間、飢えと苦難とさまざまな心配は圧倒的で、各個人の心的・精神的な諸力までも、物質的に必要なものを手に入れることにまったくかかりきりだった。……しかし善意を前提することのできるすべての人々は(ドイツと世界とにふりかかったことに、実際客観的な意味で共犯だったにせよ)ごく最近の過去を考えてみることをもうこれ

以上避けて通らないように要請されている。……第三帝国の時代との対決を歴史の部門にまかせようとするならば、それは根本的な誤りといえよう——ナチズムの問題は現代の一般的な精神的、心的、文化的現象であるから。ヒトラー運動の生起は一九一八年以後の不幸な政治・経済情勢から説明してかからなければならぬものである。でも、第三帝国の本質はなにかとう問いには、歴史的な視点を越えた解答が必要なのである。ドイツ政治の破壊はゲッベルスによって誇らかに宣伝された総力革命の一面にすぎないのであって、そのもっとも重要な面では決してなかった。ナチス主義者にとってはむしろ、ヒューマティの根絶、ヨーロッパ・キリスト教の伝統の根絶、数世紀にわたって生成されたドイツ精神の根絶が問題だったのであるが、それはきわめて悪魔的にあやつられた人種的なナチズムによつて、ついにいっさいの文化と良風の根絶であることが実証された。……もう第三帝国時代を自分の経験では知らない人々にも啓蒙は必要である。常に——猛威をふるう疫病のように——無知という真空内にはびこる悪を教育によって追放することに努めなければ、若い人々ものちになって伝染病の犠牲にならないともかぎらない。……歴史的現象としてのナチズムは過去のものであり、同じ形ではふたたびあらわれてこない。しかし人間と、神によつて人間に与えられた尊厳とを軽視し蔑視するとともに、暴力とテロによつてもはや価値秩序を知らない非人間化された集団のために、人間の道徳と精神的・心的な生活とを破壊するような世界観——こういう世界観はあれこれの形でいつまでも「現実の脅威」として残るであろう。第三帝国はまったく悪の見本であり、人間存在の危機一般に対するおそろしくはあるがどうしても必要な研究材料である——『ヒトラーはわれわれのうちに住んでいる』のだ。このことを認識した人はデモクラシーによつてなされる教育の委任と、純粹に新たに考えぬかれたキリスト教・ヨーロッパの伝統という意味における根本的な人間教育とを、もはや避けることはできないであろう。」

経歴によると、前記のシヨーナウワーは一九二〇年の生れで、ヒトラー・ユーゲントの団員であつたこともある

が、一九三七年に脱退し、非合法的な青年運動に従事し、一九四〇年から四五年までは兵隊として勤務し、一九四七年に学位をえている。またグララーザーは一九二八年の生れでエルランゲンおよびブリスルでドイツ文学、英文学、哲学、美術史などを専攻し、『ロマンティックの精神』(Geister Romanik) 『シキクスピアのハムレット』(Shakespeares Hamlet)、『近代美術への道』(Wege zu moderner Kunst)、『近代世界小文学史』(Kleine Geschichte der modernen Weltliteratur)などの著作のある人であるから、この両者ともいわゆる戦中派ないしそれに近い人と考えて差支えないであろう。このように深刻な戦争体験をもった人たちの中からナチス時代のドイツ文学に対する反省が生れてきたことは当然であつて、特にグララーザーがナチズムが単なる歴史的現象ではなく、現代の一般的な精神的、心的、文化的現象であるとしている観点はきわめて重大な意味をもっている。われわれ日本人には、グララーザーのいわゆるキリスト教的なヨーロッパの伝統というものは無縁なものであるが、ナチズムの目指したヒュマニティの根絶や、暴力とテロによつて非人間化された集団のために人間の道徳と精神的生活を破壊するような世界観は、決して無縁ではなかった。ヒトラーはわれわれ日本人の心の中にも住んでいるといえるであろう。その意味において、今日われわれがナチス時代のドイツ文学をふり返つてみることは、あながち無益なことではないであろう。

まずわれわれはナチス時代の歴史的回顧から始めよう。第一次大戦後連合国はヴェルサイユ条約に基いて掠奪政策、賠償政策を推進したため、ドイツ国内に過度の緊張を引き起し、ルール地方の占領によつて至るところに国家主義的、超愛国主義的な運動の起るの助け、ドイツの民主主義的な政府と政党が条約履行政策をとることを困難にし、それによつて健全な民主主義的發展をものはばんだ。また民主主義的な国家形態をほんとうに受け入れるだけの素地が民衆の中に育つていなかったこともつけ加えるべきであろう。この点に関してはヘルマン・ヤウ(Hermann Mau)とヘルムート・クラウスニック(Helmut Krausnick)の共著の『ドイツ最近代史』(Deutsche Geschichte der jüngsten

Vergangenheit (1931-1945) 1959) は次のように示唆に富む言葉を述べている。

「物心ついて以来君主制しか知らなかった国民にとっては、帝制の崩壊は自分の意識のもっとも深い層までゆり動かされることを意味した。この崩壊についての心かまえができており、君主制の滅亡が歴史的な社会変化の避けがたい帰結であることを理解できたものは、ほんの少数にすぎなかった。国民大衆は伝統的な秩序の崩壊を予想できなかった災厄としてたえ忍んだが、新しい秩序つくる責任を分ちあう段になると、無力だった。……一九一八年以来ドイツ国民は不安な意識適応の過程を経験していた。戦争の物質的結果である貧困の重荷が、新しい秩序にたえがたくなればかかるほど、この不安に対する反動はますます強いものになった。ナチズムの成功のひとつの理由はそれがこの不安な気持ちに効果的にはけ口を与えたことにある。その魅力は何よりもまず、それが断乎として現状を否認し、一九一八年以後のドイツの状態の三つの主な原因、すなわち (1) ドイツが戦争に負けたこと、(2) ヴェルサイユ条約に調印したこと、(3) 民主的共和制の国体をうけ入れたことの三つを断乎として認めなかつた点にあつた。……革命は伝統的な權威を倒したが、それに代るべきもの、思考や生活上の慣習にしばられる人間が信頼をよせたいと思うものを何ひとつ作りあげなかつた。ヒトラーが独裁者にのし上つた秘密は、彼がこれをすればよく感じとり、すでに存在していた『指導者』を求める声を自分にひきつけた点にある。彼は權威を求める人々の要求にすばらしい成功をもってこたえ、自分の人格に絶対の信頼を結びつけた。人々は自分たちから不愉快な共同責任をとり除くと約束してくれるものなら、だれにでもこの絶対の信頼を与える用意があつたのである。」

一九二五年にはロカルノ条約でドイツの西部国境が確定され、翌二六年にはドイツは国際連盟に加入を許されて、シュトレゼマン外交の成功によって混乱していたドイツの内外情勢にも若干の安定が生じたが、ヒンデンブルクが共和国の第二代大統領になったことは、チャーチルの『第二次大戦回顧録』によれば「戦勝国におしつけられた共和

政治や民主的制度の外被を一度むけば、戦後のドイツの真の政治権力をにぎり、国家の恒久的な機構となっていたのは、国防軍参謀本部であった。内閣を作ったり、つぶしたりするのは彼らであった。彼らはヒンデンブルク元師のうちに、彼らの権力の象徴と彼らの意志の代理人を見出したのである。一九二九年のアメリカ株式取引所における暴落が始まった世界恐慌はまたしても安定の終結をもたらし、ドイツにはふたたび経済的困窮、社会的不安の時代がはじまった。失業は増大し、階級対立は激化し、国内の不平等分子を糾合したヒトラーのナチス党は、労働者階級の革命化を恐れる資本家陣営、とくに兵器生産の大企業から支持をうけ、急速に大きな政治勢力に発展したのである。ナチス党は一九二八年には国会に十二議席を有するのみであったが、一九三〇年にはすでに一〇七議席、一九三二年には二三〇議席にまで達した。そして一九三三年一月三〇日、ヒトラーは憲法にきめられた通りの形式をふんで合法的にドイツ国首相に任命され、ナチスが政権を獲得したのである。

ヒトラーは首相に任命されたのち、自党の立場を強めるために国会解散を要求した。新たにちかえた権力を使ってたたかう選挙戦では、ナチスは著しく得票数を増大できると期待していたのである。ヒンデンブルクは二月一日、国会解散の措置をとり、三月五日を投票日と決めた。ところが投票日の一週間前の二月二十七日夜、国会議事堂の放火事件が起った。この事件は諸説が入り乱れていてまだにその真相が明らかでないが、ナチスはこの放火事件を共産党の暴力行為に対する防衛措置という口実のもとに利用した。二月二十八日、大統領はヒトラー、内相フリック、法相ギュルトナーの副署した「国民と国家の防衛のための」緊急令を発し、憲法による人身の自由の保証を撤廃した。警察は今や、逮捕状や裁判所による監督なしに逮捕し、無制限に被逮捕者の自由を奪い、家宅搜索し、信書の秘密をおかし、新聞を禁止または検閲し、政党や結社を解散し、集会を禁止し、個人財産を没収することができるようになった。しかも警察力は直接ヒトラーの手中にある権力だった。警察を支配するものは内相フリックと最大の州プロイ

センの内務長官ゲーリングだったからである。

ナチスが目指したのは、政府に完全な行動の自由を与え、国会を消滅させる全権賦与法 (Ermächtigungsgesetz) であった。しかしこれは憲法改正を意味するもので、三分の二の多数決を必要とした。ヒトラーは多数の共産黨員、社会民主黨員を逮捕し、また中間諸政党に偽りの約束を与えることによって、この法を三月二三日の国会審議において、四四一票対九四票で国会を通過させることに成功したのである。六月二日には社会民主党は解散させられ、他のブルジョア諸政党であるドイツ国権党、ドイツ国家党、バイエルン人民党、ドイツ人民党、中央党はみずから解散を宣言し、七月一四日には法律によってナチス党がドイツで唯一の政党であることが宣言された。前記の『ドイツ最近代史』の中の次の一節はこの間の事情を適切にいあらわしている。

「ドイツ国民の大多数はナチス革命の第一段階には喜んでついて行った。ほぼ一九三三年来から三四年はじめにかけて始まった第二段階では、彼らの最初の幻滅の兆候があらわれてきた。しかし革命を支持する熱烈な感情が冷めはじめたのは、やっと一九三四年六月三〇日、血の粛清（註…突撃隊長レームの殺害を指す）の結果としてであった。

その後の事態の成行きにとっては、この感情が冷めたことは大して重要ではなかった。というのは革命の経過のうちにナチスの指導部は、最初は自分たちもそれにおし流されていた『運動』のダイナミズムを、自分たちの手にしつかりとつかんでいたからである。彼らはすでに大衆の感情や気分を一定の方向にみちびき、自発性の欠けているところでは、これを作り出す助力を与えるすべを心得ていたのである。」

文学における革新は一九三三年五月十日夜。各地の大学で行われた焚書とも始まったといつてよい。フランクフルトではナチス教育学の指導的人物であった総長クリーク博士がみずから招待状を発し、ベルリンではオペラ広場で二万にのぼる「政治的、道徳的に非ドイツ的な書物」が焼かれた。^(注2) その中にはマルクス、カウツキー、ハインリッ

ヒ・マン、エーリッヒ・ケストナー、フリードリッヒ・ヴィルヘルム・フェルスター、フロイト、ケル、トゥホルスキー、オシーツキー、レマルクの著者があつた。同じような催しはミュンヒェンでも、ドレスデンでも、ブレスラウでも行われた。四月二六日にはすでに焚書のリストが公表されていたのである。そこにあげられている詩人作家には次のような名前がある。

アンリ・バルビュス（フランス）、ペルト・ブレヒト、マックス・ブロート、アルフレート・デーブリン、イリア・エレンベルク（ソヴィエト）、リオン・フォイヒトヴァンガー、ヴァルター・ハーゼンクレーファー、エーゴン・エルヴィン・キッシェ、ハインリッヒ・マン、クラウス・マン（トーマス・マンの長男）、ローベルト・ノイマン、テオドル・プリーヴィエ、E・M・レマルク、ルートヴィッヒ・レン、アルトゥール・シュニッツラー、エルンスト・トラウ、クルト・トゥホルスキー、アルノルト・ツヴァイク、シュテファン・ツヴァイクなど。

その後ただちに公共図書館からこれらの書籍は姿を消し、さらに書店からも、また家宅搜索によつて個人の家からも失われた。この作業は包括的永続的に行われ、三五年の五月十日迄に禁止された書物は四千種にのぼったといわれている。

特に槍玉に上つたのはユダヤ系作家であるが、ナチスの反ユダヤ思想は極めて重要な問題であるので、われわれはしばらくこの問題について考察したいと思う。ユダヤ人問題はサルトルも指摘しているように、全ヨーロッパ的な複雑な問題であるが、ここではナチスの問題に限ってだけ取り上げてみよう。

一八五五年にフランスのゴビノー伯は『人種の不平等について』という論文を書いて、「アーリアン人種」を、その中でも純粹な形態であるゲルマン人を、最もすぐれた最も高貴な人種であると説き、セム人種をその反対類型として肉体的、精神的に劣等な人種として対置して、アーリアン人種は将来、絶対的支配権を握るように定められている、

と主張した。ところがこの「アーリアン人種」という言葉自体すでに無意味な言葉であつた。なぜなら「アーリアン」というのは言語学上の概念であつて、生物学的な事実とは何の関係もないからである。一八一六年にフランツ・ポプは「サンスクリット語の動詞変化体系と、ギリシャ語、ラテン語、ペルシヤ語、ゲルマン語のそれとの比較について」という著者で、これらの言語がおたがいに密接な關係にあり、共通の祖語に帰することのできるものであることを立証した。その祖語がはじめ「インドゲルマン語」、のちには「アーリアン語」^(注4)とも呼ばれたのであつて、つまり「アーリアン」とは、一語族の名称として用いられるものであつて、この語族の主要な担い手はスウヴ人、ペルシヤ人、ギリシヤ人、ロマン語系人、ケルト人、ゲルマン人なのである。

このようにゴビノーの説はまったく根拠のないものであるから、これが国民の偏見と結びつかなければ何の問題にもなりえなかつたであらう。ところがドイツではこの人種的な超人説が国家の政治的経済的無力に直面して、喝采をもつて迎えられたのである。かくして国粹主義的評論家として知られたヴォルガング・メンツェル以来、学生組合^{アルゼンシャツ}がこの人種的思想の担い手になり、反ユダヤ的立場を取るようになった。彼らは進歩的で自由主義的なユダヤ人の市民階級（たとえば「青年ドイツ派」の人たちやハインリッヒ・ハイネのような人）に属する人々が自分の反動的、非民主主義的、国粹主義的運動のもつとも手ごわい敵であることを認めていたからである。そしてここからまた保守主義者の反ユダヤ主義ともつながりをもつた。その著名な代表者は宮廷説教師のアドルフ・シュテッカー、歴史家ハインリッヒ・フォン・トライチュケ、文化批評家パウル・ド・ラガルドであつた。

このような反ユダヤ的気分をさらに盛りあげたのは、ゴビノーとも個人的な交渉をもつていた音楽家リヒャルト・ワグナーとその周辺の人たち、特に女婿のヒューストン・スチュアート・チェンバレンであつた。そして一八九一年に創立されたハインリッヒ・クラスの指導する汎ドイツ連盟の手で広く市民階級の中に植えつけられるようになった

のである。ワグナーは芸術作品という媒介物を通して意識すると否とにかかわらず、民衆に直接に反ユダヤ思想を感じ得せしめたし、チェンバレンはその著『一九世紀の基礎』において、偉大なるもの、文化を創造するものはすべて大昔からアーリアン人の所産であって、(そのためにイエス・キリストまでがゲルマン化されている。)有害なもの、劣等なものとはユダヤ人に由来する、という説を主張したのである。

ヒトラーはウィーンの美術学校に入ろうとする試みに失敗し、ウィーンで広告やポスターかきの臨時雇い仕事をしながら孤独な生活を送っているときに、この反ユダヤ主義の洗礼を受け、反ユダヤ主義な宣伝がどんなに効果をおさめるものか、選挙のスローガンとしてどんなにうまく使えるものかということを知ったのである。「わが闘争」の中では「今日われわれが眼前にみる人間文化と芸術、学問、技術の諸成果は、ほとんどもっぱらアーリアン人の創造的産物である」ことを強調し、「劣等民族であるユダヤ人に対して防戦することによって、神のみわざのために戦っているのだ」とまで極言している。このヒトラーの人種思想は指導的な官吏やナチスの宣伝機構の煽動家たちによって無批判に受入れられ、科学的な(つまり本当の意味では非科学的な)論文や果てしない潮のように流れだす大量の刊行物によって宣伝され、民衆の心に植えつけられたのである。学者の中ではH・F・K・ギンターが指導的な人種理論家のにし上った。彼はすでに一九二六年に書いた『貴族と人種』の中で、新しいドイツの超人は「金髪で、背が高く、長頭で、顔は細長く、あごの線ははっきりしていて、鼻は細長く、鼻根は高く、髪はやわらくて淡く、眼はくぼんで淡く、皮膚の色はバラ色で白い」と定義している。このような新しいドイツ人の生物学的な像はたちまちに行きわたり、のちには碧い眼をした大きな全髪の人間を気ちがいのように探し求めるのが、ナチス指導部とその北方民族化運動の特徴になった。

ナチスの理論的指導者であったアルフレート・ローゼンベルクの『二十世紀の神話』の中心思想もゲルマン的人間

の讚美であつて、先に述べたゴビノーとチエンバレンの根拠のない空想的産物を取りあげて、それに誤解したニーチエと人種生物学的認識を結びつけものである。また宣伝相であつたヨーゼフ・ゲッベルスも「ユダヤ人を肯定的に克服することはできない。ユダヤ人は否定的存在であり、この存在はドイツの計算から消してしまわなければならぬ。さもないければ計算は永久に台なしになるだろう」と述べ、ユダヤ人を排除くことは「社会衛生学」であつて、「医学者が血液循環から細菌を取るように、社会的な循環から取る除くだけのことである」といつている。

ところでこのような人種思想を鼓吹した御本人たちは一体「碧い眼をした大きな金髪の人間」だったのだろうか？ 次のグラザーの言葉はナチスの人種思想の欺瞞性を完膚なきまでに暴露している。

「ナチスの人種思想をひねり出した連中こそ、その理想にもっとも遠かつたという事実はよく知られている。民衆がゲッベルスを萎縮ゲルマン人、ヒムラーを北方的人間のカリカチュアといい、理想的ドイツ人はと問われると、ヒトラーのように金髪で、ゲーリングのようにスマートで、レームのように純潔（彼は男色家だつた）な人物と答えたのはまことに當を得ていた。さらにバルト人（ナチスの意味での「劣等民族」である）のローゼンベルク、性犯罪者のシュトライヒャー、悪名高い大酒飲みのライ、脳麻痺症患者のヒトラー、モルヒネ常用者のゲーリング、錯乱の空想家ヘス、アル中で放蕩者のカルテンブルンナー、そのほかナチス・エリートのあるゆるタイプを考えてみれば、偶像と現実とを比較するのに大変適切な可能性がいくつも与えられているわけである。指導者の中ではハイトリックヒだけが長頭だつた。しかし彼こそ半ユダヤ人にほかならなかつたのである。」

このような反ユダヤ思想の立場からまつさに血祭りにあげられた作家はハインリッヒ・ハイネであつた。ハイネ生誕の地デュッセルドルフでは五月十日よりずっと以前に公然とハイネの著作の焚書が行われ、シュューベルトやシューマンの美しいメロディーもハイネの詩に関する限りはきかれなくなった。「ローレライ」の歌だけは民衆に余りに

も愛好されていたので抹殺する訳にゆかず、作者は「よみ人知らず」ということにされた。またナチスの御用学者的な存在であった文学史家アドルフ・バルテスはその『ドイツ文学史』の中で、「ハイネはユダヤ人である。そして抒情詩はほかのどのジャンルよりも、民族の性格と民族の魂とをよく多く表現する。従ってハイネがゲーテ以後、あるいはゲーテとともにドイツ最大の抒情詩人などとはとうてい考えることはできない」と、文学的評価の中に、人種的な評価を介入させている。

焚書より前の一九三三年の二月には十八世紀以来の歴史と伝統をもったプロイセンの詩人アカデミーの会長であつてハインリッヒ・マンはその職を免ぜられ、生命の危険にさらされてプラーグへ亡命を余儀なくされた。さらに三月には政治的圧力で会員の交迭が強行された。プロイセンの文相ルストが会員のうち除名を決定したのは、トオマス・マン、アルフォンス・パケ、アルフレート・デープリン、フランツ・ヴェルフェル、ルネ・シッケレ、レオンハルト・フランク、ゲオルク・カイザー、フリッツ・フォン・ウンルー、ペルンハルト・ケラーマン、アルフレート・モンベルト、ルードルフ・パンヴィッツ、ルートヴィヒ・フルダ、ヤーコプ・ヴァツサーマンの十三人であつた。当代随一の閥秀作家であつたりカルダ・フーフは自発的に脱会したが、ゲルハルト・ハウプトマン、オスカール・レールケ、ゴットフリート・ベンはそのまま残つた。ナチスは外面上反文化的な姿勢を取るのを避けるために、このアカデミーを解散はせず、有害な分子だけを「清掃した」と称していた。そして新たにヴェルナー・ボイメルブルク、ハンス・フリードリッヒ・ブルンク、ハンス・カロッサ、ペーター・デルフラー、パウル・エルンスト、フリードリッヒ・グリーゼ、ハンス・グリム、ハンス・ヨースト、エルヴィーン・グイード・コルベンハイヤー、アグネス・ミューゲル、ボリス・フォン・ミュンヒハウゼン、ヴィルヘルム・シェーファー、エーミール・シュトラウス、ヴィル・ヴェスパーが招請されたが、カロッサは受けなかつた。そしてハンス・ヨーストが会長に、ブルンクが副会長に選ば

れた。六月七日の改組会議の経過についてレールケは日記の中で出だしはものしい。総裁の文相ルストは飾り者だ。……古い会員は、私を除いてみな閉め出された。シュトゥッケン、モロー、シオルツ、ベン、ザイデル、ハルベなど。……空つばでたちの悪いさわぎ屋シェーファーとコルベンハイヤーのおかげで、会議のレベルは信じられないほど低下した。ヴィル・ヴェスパーの人はばからぬ緊張ぶりも軽蔑するわけにはいかない。……こういう仲間に入ると、私はまるで自分が空気のような存在になった感じがする」と書いている。(ショーナウワーの引用による。)

九月二十二日には、「指導するもの」と「服従するもの」という形での政治上の「一元化」(Gleichschaltung)が文化の面でも「全国文化院」法の制定となった。この文化院設立の目的については「国家の任務は文化の内部において有害な諸力に打ち勝ち、価値多き諸力を促進すること、しかも民族共同体に対する責任感という基準に従って行うことである。この意味においては文化的創造は個人的で自由なままである。しかしながら、ドイツ文化の政策をおし進めるためには、創造する人たちをあらゆる領域において、国家の指導のもとに統一した意志形態へとまとめあげる必要がある」と述べられており、その条文には、第一条、民族啓蒙・宣伝大臣は委任を受けてその管轄下にある諸活動部門に属する者を公法人に統合する権限を有するものとする、第二条、第一条に基き、以下の公法人が設立される、一、全国著作院、二、全国新聞出版院、三、全国放送院、四、全国演劇院、五、全国音楽院、六、全国造型美術院、第四条、全国文化院は民族啓蒙・宣伝大臣の監督下にある、第七条、民族啓蒙・宣伝大臣はこの法律施行のため諸法令および補足的規則をもふくむ一般的行政規則を公布する権限を有する、とある。

十一月一日には「全国文化院法実施のための最初の規則」が公布され、その第三条には、全国文化院はその属するすべての活動部門の全員の協力により、民族啓蒙・宣伝大臣の指導のもとに、民族と国家のためにドイツ文化を振興する任務を有する、と書かれている。この全国文化院の設立はヒトラーの臨席のもとに十一月十五日ベルリンの音楽

堂ではなやかに行われ、第一回の会議は二十三日ベルリンで開催された。全国文化院の設立式に際してゲッベルスは「芸術は絶対の概念ではない。芸術は民族の生活のうちにあってはじめて生命を獲得する。芸術的創造にたずさわった過去の時代の人間の最大のあやまちは、彼らがもはや民族そのものと有機的な関係になく、そのため彼らに日々新たな栄養を供給する根を失ったということである」と演説し、また全国音楽院の会議では経済相ヴァルター・フンクは「芸術もまた、国民に対して精神的な影響を及ぼす使命を有するものの一つである。なぜなら芸術は国家政策にとつて、宣伝の不可欠な一部だからである。芸術によって、また芸術において、国民の精神的感化が行われる。そして国家がそれを指導し、形成し、内容を充たさなければならぬ。」と述べている。ナチスが芸術に対してこういう見解をもっていたかは、これらの言葉からはっきり読み取ることができる。かくしてすべての芸術、従つて文学もまた、宣伝相ゲッベルスの指導のもとにおかれ、創造の自由を奪われて、「精神の兵役」に召集されることになったのである。ハインリッヒ・マンは「閉め出されるよりは統制されるほうがまだという！、銀行家ならそれでもやって行けるだろう。しかし作家はそうは行かない。作家の名誉を放棄することは自分自身を作家という職業から閉め出すことだ。こういう不名誉を感じないものは、そもそも文学を軽んじるものだ。しかしそれを感じながら甘んじて受け入れるものは、人間的に無性格無味乾燥となり、ただなんの効力もないものばかり生み出すことになる」と書いているが、このような状況に追いつめられた作家の苦衷を余すところなくつくしている。

三三年から三四年にかけては、市民権を剥奪されたもののリストが三次にわたって出されたが、その中には多数の作家が含まれており、第一次ではフォイヒトヴァンガー、F・W・フェルスター、ヘルムート・フォン・ゲルラッハ、H・マン、クルト・トゥホルスキー、第二次ではヨハネス・R・ベッヒャー、アルベルト・アインシュタイン、ルードルフ・レオンハルト、第三次ではテードール・プリーヴィエ、ブレーデル、レオンハルト・フランク、クラ

ウス・マン、ボードー・ウーゼ、エーリッヒ・ヴァイネルト等がある。そのほかユダヤ系の思想家ジンメル、フツサール、文学史学ジールショウスキー、グンドルフなども禁止され、グラーザーによれば「第三帝国の最初の何年かのうちに、二五〇人の著作家が沈黙するか、ないしは国外に亡命しなければならなかった。ドイツの文学生活の蔵払いは完全な進行を続けたのである。」

かくして自由なドイツ文学はドイツ以外の国で、モスクワ、イギリス、スイス、スウェーデン、メキシコ、パレスティナ、南米、アメリカなどで苦難の道をたどることになったのであるが、ナチスは一体いかなる文学を真のドイツ文学としていたのであろうか。ショーナウワーは、「第三帝国において一九三三年以来『真にドイツ的なもの』として宣伝されていた文学はヒトラーの命令や大臣の命令によってあらためて書かれる必要はなかった。それはすでに存在したのである」といい、ポイメルブルク、ブルンク、クラウディウス、デルフラー、ドヴィンガー、フレンセン、グリーゼ、ヨースト、ヴェスパー、グリム、コルベンハイヤー、シェーファー、シュテアーなどの名をあげ、これらの作家の著作がたくさんの版を重ねていたことをあげている。（このような本が歓迎された理由として、ショーナウワーはドイツ市民の大多数がワイマル共和国に対して無関心であったか、あるいは敵意をもち、新しい国旗である「黒・赤・金」の三色旗を一九一八年の「反逆者」の旗とみなすなど、反動的な傾向に固執していたことをあげていることは注目に値する。）グラーザーも「民族主義的なもの、人種的なものの血の流れを神化したナチズム」がそれに相応する文学を準備しようとして、十九世紀の末以来盛んになってきた「民族芸術」をその系口としたことを述べている。すでに一九〇一年に出された「今日の文学的青春。四句節の説教」というパンフレットで、フリードリヒ・リーンハルトは「わが国の文学には、民族の魂の脈動がない。そして今日、まじめな意欲をもって、誇り高い国民意識と豊かな心情および精神の力とをもって、しかしまたドイツ語を話す人々全体に対する生き生きとした感情をもって、文学に

入って行く者は、民族か文学か、人類か芸術か、人格か技巧かという苦しい選択の前に立たされて悲しい驚きを味あわされる。私にとっては、この疑問は解決済みである。完全な人間であることが必要なものであって、文学者たることは余計なことである。」と警告している。彼は新方向のための雑誌を創刊して、それに「故郷——文学と民族性のための雑誌」と名づけた。またこのリーンハルトと同じような考えをもって活動した人に文学史学アドルフ・バルテルスがある。

このような、「民族主義的な文学」は浪漫主義と写実主義以来、純粹に自然、郷土に結びつこうとつとめている詩人たちの文学とは原則に區別されなければならない。偉大な形式的能力と思想的深みをもっているこの郷土文学に反して、のちに「血と土の文学」と呼ばれる民族文学はくだらないにせものであって、形式的にも内容的にも価値のないものである。ナチスがバイエルンの農民出で素朴深遠な詩人オスカル・マリア・グラーフを自分たちの仲間に数え入れようとしたとき、彼はウイーンからゲルペルスにあてて次のような有名な手紙を書き、本物の郷土文学と、まやかしものの血と土の文学の區別をはっきりさせた。「私も焼いてください。『ペルリーナー・ベルゼン・クリーア』紙によれば、私は新しいドイツの白表にのっているそうです。そして私の著書は代表作の『われわれは囚われ人である』を除いて、ことごとく推せんされました。だから私は新しいドイツ精神の代表者である使命を担っているわけです。私はいたずらに、なんでこんな屈辱を受けたかを自問します。私の全生活と私の全著作とに従って、私は自分の本が薪の純粹な炎に委ねられる権利をもっています。……ドイツ精神の作品を焼いてください。ドイツ精神そのものはあなたがたの汚辱同様決して消えることはないでしょう！」（グララーザーの引用による）

このような民族主義的作家の代表者としてはハンス・フリードリヒ・ブルンク、モーリッツ・ヤーン、ヴィル・ヴェスパー、ヨーゼフ・ペーレンスリートテンオールなどをあげることができる。ブルンクは一九二五年前後に三部

作『始祖の伝説』(Urvatersaga)、一九二四年には『シュテリング・ロートキンゾーン』(Stelling Rotkinsohn)を書いているが、いずれも、北方ゲルマン民族から材料をとっている。彼は自分の作品『シュテリング・ロートキンゾーン』について、このような北方民族のあいだには、カール大帝の後継者が相争っている頃、新しい国家を夢見る奇妙な人達であられた。これらの夢想家たちの教えは今日いわれる言葉のようにひびき、おそらくわれわれの心の中で消えたことはなかったであろう」と書いている。ヴィル・ヴェスパーは反ナチ的な詩人に対して様々な誹謗を加えた人物であるが、紀元千年頃のアイスランドとグリーンランドを舞台にした小説『不屈の種族』(Das harte Geschlecht)を書き、その序文の中で「私が今から物語ろうとする話は千年前に起った。そこでそんな古い話はわれわれに何の関係があるのかと読者は考えるかも知れない。しかし千年は神の前では一日に等しい、といわれるのは正当である。当時の人間と今日のわれわれとはあまり相違はない。……われわれもまた、父祖のはるかなる種族のうちに生きている。そしてわれわれのうちにもまた、今日現在、われわれを血に伝える祖先が、われわれの所有物としてではなく、生きているのである」と述べている。モリッツ・ヤーンはノルウェーに取材した『外フィヨルドの人々の物語』(Geschichte von den Leuten an der Außenfjorde)の中で、夫の家柄が卑しいために夫を軽蔑し、さらには父の血を受けついだために息子までもさげすみ、夫と子供が戦いに倒れるまで運命との和解をがえんじなかった女の物語を描いている。ペーレンス・トールテンオールは一九三五年に十四世紀の農場に主題を求めた農民小説『裁判屋敷』(Der Femhof)と『グドレーネ夫人』(Frau Magdene)の二つを書いたが、これは一九四二年までに五十万部も売りつくされたといわれている。歴史に取材したものではないが、ハンス・グリムの『土地なき民』(Volk ohne Raum)もナチス民族主義文学の代表的な作品といえるであろう。この千頁以上にわたる小説は一九二六年に最初に出版されたが、今日まで五十万以上の版を重ねている。これはコルネーリウス・フリーボットという百姓の息子の物語で、土地がせまいために、

都市へ追いやられ、さらには南アフリカにまで追いやられるが、そこでようやく生活の基礎が固つてきた時、第一次大戦のために土地財産を棄てさらねばならぬというドイツ民族の苦難を描いたものである。彼はこの小説のはじめに「ドイツ人が善良で美しくなるためには、周囲に土地を、頭上に太陽を、心に自由を必要とする」と書いている。このようにドイツ民族を特殊な地位において、その運命の苦難を強調するために、ナチスはわざわざドイツ史の中から民族的な人物を探し求め、カール大帝に対抗したザクセン人の指導者であるヴィドゥキンントや、ルターや、ハインリッヒ一世や、フツテン、マイスター・エクハルトや、ヤーコプ・ペーメやコペルニクスなどの人物を自分の都合のよいように、でっち上げたことも銘記すべきであろう。

以上あげて作家のうち、グリムとブルンクを除けば、他の作家はほとんど文学史上にその名をとどめていないが、もっと優れた詩人として、コルベンハイヤーの名もまた血と土の作家としてあげらるべきであろう。彼は一九六二年に死んだが、一九三四年に書かれた戯曲『グレゴールとハインリッヒ』は「復活するドイツ精神」にささげられ、その最後で皇帝ハイリッヒ四世はローマ法王の主権要求を拒否して「皇帝のものは皇帝にかえせ」の叫ぶのである。もっとも成功を博したのはパラツェルス三部曲で、第一巻『パラツェルスの幼少時代』(Die Kindheit des Paracelsus)は一九一二年、第二巻『パラツェルスの運命の星』(Die Gestirn des Paracelsus)は一九二二年、第三巻『パラツェルスの第三の国』(Das dritte Reich des Paracelsus)は一九二六年にそれぞれ出版され、ナチスの政權獲得以前のものであるが、その影響は一九三三年以後に始まったといつてよい。これは中世と文芸復興と宗教改革とがぶつかりあつた千五百年頃の物語で、一九三三年には国民版が出版され、ドイツの各大学ではコルベンハイヤーについてのゼミナールが設けられて、彼の作品はゲルマン精神の自己実現の戦いの芸術的な表現として解釈されていたのである。

このように古いドイツの英雄や指導者を讃えたり、よごされないたくましい農民を描く民族主義的な作品とならんでナチスが歓迎したのは戦争讃美の文学である。ユダヤ人問題のところでも少しふれたように、ナチスの世界観はダーウィンの論概念（強者の支配、劣等者の絶滅、生存競争など）を取り上げて、動物界から人間の領域に移し、さらにそれに誤解された、あるいは偽造されたニーチェの超人や価値の転換の解釈をつけ加えたもので、人間を獣性の状態にもどそうとした反人道的なものであった。したがってナチスが闘争を最高の価値を考えたの当然である。このような戦争文学の作家としてはヴェルナー・ボイメルブルク、エトヴィーン・エーリヒ・ドヴィンガー、ルードルフ・G・ビンディング、ハンス・ツェーバーライン、ハンス・ヨースト、ハインツ・シュテグヴァイト、フランツ・シャウヴェッカーなどの名前をあげることができる。しかし彼らの描いた戦争像は青春のロマンティズムと結びついた戦争の一面的讃美であって、完全にゆがめられたものである。たとえば人間の最高の幸福は戦友愛であって、これは戦争を通してのみえられるといった調子のもので、戦争事象の真の悲劇はまったく無視されてしまうのである。ボイメルブルクの『ボーゼミュラー部隊』(Gruppe Bosenüller)は第一次大戦中のヴェルダンを舞台にしたもので、一九三〇年に出版され、三三年までに三万部以上も売行きを見せたこの種の文学の代表作である。ツェーバーラインもとても人気のあった作家で、ナチス党員の本棚には必ず彼の作品がおさめられていたといわれている。とくに一九三一年に出版された『ドイツへの信仰』(Glaube an Deutschland)は映画化もされて、十年間に七十五万部も売りつくされた。

ナチスの作家とはいえないがエルンスト・ユンガーもまた「戦争は万物の父である」というヘラクリトスの言葉から出発した作家で、その『内的体験としての戦い』(Der Kampf als inneres Erlebnis) (一九二九)の中で「かつてのどの戦争よりも容赦なく烈しく残酷に戦い抜かれた近代戦、さんごう戦の精神は、これまで見られなかった人間を生

む。それはまったく新しい人種、体现されたエネルギーで、最高の重荷を負うていた」と書き、近代戦に素朴な礼賛を捧げている。ユンガーはまた「ドイツの青年が前線兵士の象徴的な姿を模範とし始めることほど歓迎すべき徴候はない。……ただ死に直面してのみ、ゲルマン的な純潔が最良の人々の心の中に保持されることが可能であつた」と述べ『鋼鉄の嵐』(In Stahlgewittern)・森』(Das Walddchen)・火と血』(Feuer und Blut)などで、若の世代が「前線戦士の態度」をとる準備をするのを助けた。ユンガーの場合は彼のニヒリズムからの発展であつて、まやかしの戦争文学ではないが、結果としてナチスに協力した形になったことは否定できないであらう。

最後にわれわれは亡命作家についてふれなければならないが、亡命作家は大きく分けて国外亡命作家と国内亡命作家の二つに分類することができる。まづ国内亡命派の方から見て行くと、前述のような民族主義的文学や戦争文学が版を重ね、ナチス国家が自分たちの線に沿う文学を作り出そうと試みたにもかかわらず、第三帝国時代には公けには禁止されている市民的文学に数えられる何冊かの書物が出版されていたのである。このようにドイツに残って出版活動を行っていた市民的文学の作家たちは普通国内亡命派と呼ばれ、ヴェルナー・ベルゲングリューン、ゲオルク・ブリッティング、ハンス・カロッサ、カージミール・エートシュミット、マンフレート・ハウスマン、ヴィルヘルム・レーマン、オスカル・レールケ、エルンスト・ペンツォルト、ルードルフ・アレクサンダー・シュレーダー、イーナ・ザイデルなどがその主な代表者である。これらの作家たちは特別に国家の恩恵にはあずかりはしなかったが、その存在を許されたのである。ナチスにとってはこのような文学の存在を許しておくことは、国外に対する威信の上から必要であつたし、許しておいたからといって国家や文化政策に対するいかなる危険とも結びつかないのである。なぜなら前記の作家たちは形式的にも内容的にもナチスの意味において問題がなかったからである。彼らの作品は読者大衆に理解しやすいものであつたし、実験的な試みをしている訳でもなく、国際的な芸術運動に結びつこうと

したものでなく、ナチスにとって都合の悪い政治的傾向を示しているのでもなかった。ドイツの古典主義や浪漫主義の伝える教養の伝統の線に沿った教訓的な内容をもったもので、ナチスから見れば宣伝手段としては有用であった。つまりナチスは市民的思想や感情をもった人たちに、自分たちが文化愛好者であり、精神の自由を尊重しているのだという幻想をいだかせるために、市民的文学を利用したのである。従ってこのような市民的文学をまったく無価値なものとしてしりぞけることも誤りであるが、そうかといってその社会的意義を過大評価して、逃避の文学以上のものとも考えることも誤りであろう。

このような市民的文学は第三帝国においてヒトラー政権の犯罪者的な政策に対する憎しみを保持して、ドイツの市民階級の個人的、人間的な存在を擁護するのを助けたという意味においてはヒューマニスティックな機能を果たしたことは確かであるが、この憎しみは本当の精神的な抵抗にまで高まることはなく、いわんや有効な政治的な抵抗にまで高まることはなおさらなかったのである。従っていわゆる国内亡命派の大学に逃避の文学、田園的なもの、時間を超越した、単純な人間関係、伝統主義、古い真理や不滅を不自然に強調することなどへの逃避の文学であった。たとえばエルンスト・ヴィーヒェルト（彼は一九三六年にミュンヘン大学生に行った講演と牧師ニーマラーの蒙った非人道的な虐待への抗議によってナチス当局を刺激し、一九三八年には逮捕されて、ブーヘンヴァルトの強制収容所へ投ぜられ、四月後に出所したが、その後も秘密警察の監視のもとにおかれた。）はその講演『詩人と青春』（*Der Dichter und die Jugend* 1963）の中で「永遠なものは静寂であり、無常は騒がしい。神の意志は沈黙のうちに地上の争いを超越する」と述べている。この言葉はとりもなおさずドイツの市民階級の現実に対する諦念を意味している。

またハンス・カロッサも第二次大戦が勃発する一年前に『現代におけるゲーテの影響』（*Wirkungen Goethes in der Gegenwart*）に題する講演を行い、「時代に制約されたゲーテの考えはその効力を失うことがあるかも知れないし、

あれこれの片手間の業績は色あせるかも知れない。しかしエネルギーによってみたされた本質は見えざるものの中に破壊されることなく生きている。われわれはこの本質に期待しようではないか」と述べている。カロッサの作品はナチスの時代になって『指導と忍従』（Führung und Gehert 1933）、成年の秘密』（Geheimnisse des reifen Lebens 1936）、『美しき惑いの年』（Das Jahr der schönen Täuschungen 1941）などが出版されているが、彼の作品はナチスの時代になって著しく読者層を広げ、確実な固定層が作られるまでになった。それは彼の作品が周囲の騒々しい日常生活の中で、神の創造というものの隠れた意味がけがされないままに残っているのだという精神的な確信を人々に与えたからである。つまり彼の作品の成功の秘密はその精神安定剤的な作用にあったのである。

慰安としての文学という意味では前記のヴィーヒェルトの作品も同様であって、ナチス時代に発表された彼の作品も同様であって、ナチス時代に発表された彼の作品『少佐夫人』（Die Majorin 1934）、『牧童物語』（Hirtennovelle 1935）、『森と人々』（Wälder und Menschen 1936）、『単純なる生活』（Das einfache Leben 1939）は他の作家に見られないほどの版を重ねたのである。代表作『単純なる生活』の主人公は大都会の喧騒にいや気を起し、東プロシヤのマズール湖沼地帯へ移住し、漁夫や猟師として生活しながら、人生の意義についての冥想にふけるのである。

イーナ・イデルの『希望の子』（Wunschkind 1930）、『レンファッカー』（Lennacker 1938）、『私たちの友ベレグリー』（Unser Freund Peregrin 1940）などがよく読まれたも、一部は民族主義的な傾向もあるが、その中心は個人的な魂の救済である、そのほかナチス治下では教会を通じてかなりな抵抗を行ったカトリック系の作家たち、ベルゲンダリューンの『大暴君と審判』（Der Großirann und das Gericht 1935）やゲルトルト・フォン・ル・フォールの『マダブルクの婚礼』（Die Magdeburgische Hochzeit 1936）（ル・フォールは戦争が始まってからスイスへ亡命した）、や、ラインホルト・シュナイダーの『カール五世の前に立つラス・カサス』（Las Casas vor Karl V 1938）（シュナイダーは戦争

中宗教的文書とソネットを流布したために大逆予備罪に問われた）や、シュテファン・アンドレスの『われらユートピアなり』(Wir sind Utopia 1942)や、キリスト教系の作家ではないが前記のユンガーの『大理石の断崖の上で』(Auf den Marmor-Klippen 1939) (ユンガーは第二次大戦中には大尉としてパリに侵入した。その後一九四一年以来平和運動を企図したため、生命の危険にさらされた。)などもナチスに対する批判を含んだ問題作であるが、すべて内面性の問題として取扱われており、真のレジスタンス的な人物を作り出してはいない。

さて一方国外亡命作家の運命はどうなったであろうか。

故郷の人々から逃げてきて

いまやつとフィンランドに着いた僕。

昨日までは知らなかった友人たちが

綺麗な部屋に床をのべてくれた。

ラジオからは人非人の捷報が聞え、

おもわず世界地図をみつめる僕の眼に

上の方の北のはてラップランドの氷の海に

まだ一つ小さな出口のあるのがみえる。

とベルト・ブレヒトはその『流涕詩集』(Gedichte im Exil)の中で亡命者の苦難を歌っているが、詩人あるいは作家がその生命である言葉を失って異国へ亡命したとき、どんな様々な困難に出会ったかは想像にかたくない。しかもナチスは隣国であるオーストリー、チェコ、オランダ、フランスとつぎつぎにその魔手を伸ばしていったのであるからなおさらのことである。従って苦難に負けてみずから生命を絶った人々も多かった。いろいろなベン・ネーム

を用いてドイツ人の俗物根性や国粹主義を調刺したクルト・トゥホルスキーは三五年スウーデンで自殺し、表現主義の作家として著名であったエルンスト・トラーも三九年にニューヨークのホテルで一命を絶ったし、シュテファン・ツヴァイクも「六十才をすぎても一度やり直すには、特別な力が必要だ。私の力は長い間の故郷を失った流浪の旅でつきはててしまった」と遺書を残してブラジルで四二年自殺をとげた。

しかしすべての作家が敗北の道を選んだのではなかった。強靱な不屈な意志をもって組織化された機関を通じて、自由なドイツ文学のためにヒトラーと戦った多数の人達がいたのである。まずオランダではクヴェリド書店とアレルト・ド・ランゲ書店が、ベルリンのキーペンホイエル書店の協力者であったランツホフ博士とランダウエル博士を中心としてアムテルダムに設立された。クヴェリド書店の方はヴィツキー・バウム、アルフレート・デープリン、リオン・フォイヒトヴァンガー、ブルーノ・フランク、レオンハルト・フランク、エルンスト・グレーザー、ゲオルク・カイザー、エーミール・ルートヴィヒ、マン一家（ハインリッヒ、トオマス、エーリカ、クラウス）、エーリヒ・マリイア・レマルク、エルンスト・トラー、ヤーコフ・ヴァツザーマン、アルノルト・ツヴァイクなどの作家が結集し、三年九月からはクラウス・マンが編集者となり、ハインリヒ・マン、アンドレ・ジード、オールダス・ハックスリーを顧問として月刊文芸誌『集合』（Die Sammlung）が発行された。アレルト・ド・ランゲ書店の方にはベルト・ブレヒト、マックス・プロート、ヘルマン・ケストン、エーゴン・エルヴィン・キッシュ、テオドル・プリーヴィエ、ルネ・シッケレなどが顔がそろえ、三四年にはケステンが現代ドイツ作家短篇集を編んでいる。

一万ベルリンにあったマルク書店は三三年三月には早くもブラーグへ移り、ここにはブレヒト、ヴィリー・ブレーデル、オスカル・グラーフ、フラツン・カール・ヴァイスコップフなど社会主義的傾向をもった人たちの作品が集まり、シンクレア、スメドレー、エレンブルク、シヨローフなど外国作家の翻訳書も出された。さらにグラーフ、ア

ンナ・ゼーデルスなどが編集者となって月刊誌『新ドイツ文芸』(Neue Deutsche Blätter)が出版された。この『新ドイツ文芸』は前記の『集合』とともにわずか二年ぐらいの寿命しなかったが、初期のドイツ亡命作家の牙城となつたのである。

またスイスでは三十七年九月トオマス・マンがコンラート・ファルケと共同してチュリヒのオペレヒト書店から隔月刊誌『尺度と価値』(Maß und Wert)を出した。スイスは比較的亡命作家に同情と理解を示した国で、フェルディナン・ド・ブルクナーの『人種』(Die Rassen)など反ナチ的な演劇も上演されたのである。

パリもまたドイツ軍に占領されるまでは亡命作家の大きな拠点となっていた。かつてのベルリンのフォス新聞のG・ベルンハルトが三三年十二月に創刊した『パリ日刊新聞』(Pariser Tageblatt)はドイツの亡命者たちの出した唯一の日刊新聞であつた。また三三年十月には「ドイツ作家防衛同盟」が結成され、ハインリヒ・マンが名誉会長におされた。三五年には「文化擁護のための国際作家会議」が催されている。

もう一方の拠点モスクワでは『尺度と価値』に先んじて三六年六月、ブレヒト、フォイヒトヴァンガー、プレーデルの三人を編集者として亡命文学者の機関紙『言葉』(Das Wort)が発刊された。しかしこれは二年半後に、同じくモスクワから発行されていた『国際文学』のドイツ語版に吸収された。

スウェーデンのストックホルムでもドイツのフィッシャー書店が移ってきて、スウェーデンの出版社と結んで廉価版の業書『広場』(Forum)を刊行し、トオマス・マン、ルネ・シッケレ、フランツ・ヴェルフェル、シュテファン・ツヴァイクの四人を顧問として古典の維持と現代ドイツおよび世界文学の紹介に努力した。

その後ナチスがヨーロッパを席捲するとともに、亡命作家や出版社は大移動を余儀なくされ、その中心は徐々にモスクワおよびアメリカ大陸へ移って行つた。アメリカでは三五年の秋、ニューヨークを中心として各州に支部をもつ

「ドイツ文化自由協会」が発足し、さらに三六年秋にはドイツ・アカデミーの結成へと発展し、ドイツ文化をひろくアメリカ大衆へ滲透させるために重要な役割を果たした。亡命者の新聞としては週刊紙の『建設』(Aufbau)や『ジャーマン・アメリカン紙』がニューヨークから発行された。またベルリンから亡命したユダヤ資本のショットケン書店が、M・ブローと協力して、中断されていたカフカ全集を復活したことも注目すべきことである。中米ではメキシコに多くの作家が集まり、月刊誌『自由ドイツ』が刊行され、南米でもアルゼンチンやチリーでもいくつかのグループが存在した。

このようにしてドイツの自由文学は世界各地でさまざまな流弊の悩みにあいながらも、若斗を続け名作を生んだのである。戦後問題にされたいくつかの作品をあげると、ハルト・ブレヒトの『三文小説』(Dreigroschenroman 1934)、『肚っ玉おっかあと子供たち』(Mutter Courage und ihre Kinder 1941)、『トーマス・マンの『モーズフとその兄弟』(Joseph und seine Brüder 1933-43)、『フリーヴィエの『スターリンググート』(Stalingrad 1945)、『ゼーゲルスの『第七の十字架』(Das siebente Kreuz 1941)、『ヴェルフェルの『ベルナデットの歌』(Das Lied von Bernadette 1941)、『フォイヒトヴァンガーの『オッペンハイム同胞』(Geschwister Oppenheim 1933)、『不実のネロ』(Der falsche Nero 1936)、『ハインリヒ・マンの『アンリ四世の青年期』(Die Jugend des Königs Henri Quatre 1935)、『アンリ四世の完成期』(Die Vollendung des Königs Henri Quatre 1937)、『モーベールの『特異な男』(Der Mann ohne Eigenschaften 1930-1943)、『ブロッホの『ヴェルギリウスの死』(Der Tod des Vergil 1945) などがある。

(注1) ヘルマン・ヘッセは一九三五年に、あるスウェーデンの雑誌の中で当時のドイツ文学の現況について「ドイツにおいて現在文学と称している作の大部分は偶然的な時勢の産物にあつて、まじめな考慮の対象とはなりえないものである。」と書いている。

(注2) 『新ケルン日刊新聞』の一九三三年五月十二日号はこの時の情景を次のように報じている。

「オペラ広場は広範囲にわたつて遮断され人々の厚い輪によつてかこまれた。十一時に褐色のシャツと学生組合の最初の行列(その先頭にはベルリン政治教育学の新任教授であるアルフレート・ボイムラーが行進していた。)」がオペラ広場に到着した。彼らはいくつに展開し、手にもつたたいまつを真中にたてられた薪の山の中へ投げ入れた。すると火花がゆらゆらと燃え上つた。ペーレン通りの方向から巨大なサーチライトが全広場を照らしていた。非ドイツ的な書物をオペラ広場の薪の山の近くまで運んできた車から学生たちが長い列を作り、本を手から手へと渡した。それから本は火のなすままにゆだねられた。群衆の歓呼のうちに十一時二十分今日この薪の山の上で象徴的な行為として焼かれる最初の二千以上の本が炎の中へ投ぜられた。法科学生ヘルベルト・グートヤールがドイツの学生および同志に対する短い挨拶の言葉を述べた。本が燃えているあいだ突撃隊と親衛隊の楽団が愛国調の歌や行進曲を演奏し、さらに学生組合の九人の代表者(書物はそれぞれの領域に応じて分けられていた)が人目をひく言葉をいながら非ドイツ的人物の本を火の中へ投じた。

第一リーダー「階級斗争と唯物論に抗して、民族共同体と理想主義的人生観のために！ 私はマルクスとカウツキーの書物を火に投ずる。」第二リーダー「デカダンスと道徳的頹廢に抗して、家庭と国家における醇風美俗のために！ 私はハインリヒ・マン、エルンスト・グレーザー、エーリヒ・ケストナーの書物を火に投ずる。」第三リーダー「無定見と政治的叛逆に抗して、民族と国家への献身のために！ 私はフリードリヒ・ヴィルヘルム・フェルスターの書物を火に投ずる。」

第四リーダー「本能生活の過大評価に抗して、人間精神の高貴のために！ 私はゾイクムント・フロイトの書物を火に投ずる。」第五リーダー「歴史の偽造と歴史上の大人物の誹謗に抗して、ドイツの過去に対する畏敬のために！ 私はエーミール・ルートヴィヒとヴェルナー・ハーゲマンの書物を火に投ずる。」第六リーダー「民主的ユダヤ的刻印のある異民族的なジャナリズムに抗して、国家建設事業の責任ある協同のために！ 私はテオドル・ゾオルフとゲオルク・ベルンハルトの書物を火に投ずる。」第七リーダー「世男大戦の兵士に対する文学的裏切りに抗して、誠実の精神における民族教育のために！ 私はエーリヒ・マリーア・レマルクの書物を火に投ずる。」第八リーダー「ドイツ語の不遜な破壊に抗して、わが民族の貴重

な財貨の涵養のために！ 私はアルフレート・ケルの書物を火に投ずる」 第九リーダー「傲岸不遜に抗して、不滅なドイツ民族精神に対する畏敬のために！ 炎よ、トラホルスキーとオシーツキーの書をも呑みこめ。」（シヨーナウワーの引用による。）

（注3） J・P・サルトル 「ユダヤ人」

（注4） アーリアはサンスクリットで「高貴な」を意味する。